「ごんぎつね」における共依存の病理
――〈共依存〉の観点から教材「ごんぎつね」を読む――

中村哲也

一、はじめに

私は、これまで、精神医学における嗜癖行動研究の中の、関係嗜癖のひとつである「共依存」概念に依拠しながら、いくつかの文学教材の分析と解釈を試みてきた。ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」における「僕」と「エーミール」の人物関係、太宰治「走れメロス」における「メロス」とその「妹」、さらには「王」や「セリヌンティウス」との人物関係の問題に、共依存概念を使うことで、分析と解釈の視座の新たな可能性について論じていた。

ところで、以前、私は、新美南吉「ごんぎつね」について論じた際、その結びで、以下のように、「共依存」の観点から取り上げることができることを示唆していた。

ごんと兵十との関係性、ごんのひたむきな兵十に対する「つぐない」の行為を読み解き、説明する上で、現代の精神医療の最前線、とくに、依存症治療や嗜癖治療の領域で使われる「共依存」（co-dependency）観点から、とらえることもできるだろう。兵十の行動や日常生活の些事に常日頃から密かにしかも執拗に関心を寄せ、兵十にかげながらつきまとい、いつも兵十にかかわって気を揉んでいるごんの態度や行動は、まさに「共依存」のそれではないだろうか。ごんはおのれの人生の孤独や空しさを兵十という他者によって埋め合わせようとしたともいえる。したがって、「つぐない」とは、兵十とつながるために仮構された強固な幻想の物語であり、この物語という紐帯がかあればこそ、兵十とのごんのかかわりは幻想的に担保され続けたのである、ほかでもなく、火なわ銃によってごんが兵十に射殺されるまで。[1]

このときは、まだ、十分な構想には至っていなかったが、その後、わが国の依存症や嗜癖研究のパイオニアである斎藤学、信田さよ子らの著書を読み進めていくなかで、やはりどうしても、「ごんぎつね」という作品を「嗜癖」や「共依存」の観点から論じたい、否、論じなければならないという思いを強く持つようになった。

私は、本稿において、「少年の日の思い出」や「走れメロス」と同様、「国民的教材」として長年にわたり小学校国語教科書に掲載され、今日に至っている新美南吉「ごんぎつね」を取り上げ、主人公「ごん」と「兵十」との「人物関係」のあり方・その問題性について、「共依存」の観点から論じたいと考える。

また、ここ数年の間に、府川源一郎『「ごんぎつね」をめぐる謎』(教育出版　二〇〇〇年)、鶴田清司『なぜ日本人は「ごんぎつね」に惹かれるのか』(明拓出版　二〇〇五年)が上梓され、私にとっても大きな刺激となった。二人の徹底した問題意識は、国語教材の文化論・文化研究(カルチャー・スタディーズ)ともいえる視角から、なぜ「ごんぎつね」が小学校の国語教材としてこれほどまでに学校現場で受け入れられ普及し、評価されてきたのかということ(「ごんぎつね現象」と府川源一郎は呼ぶ)を多角的に考察することであった。特に私が興味深かったのは、国民的教材と言われるほどの絶大な「ごんぎつね」人気、その隆盛の背景には、特殊日本的なものがあること、すなわち日本および日本人の文化構造や精神構造ともかかわるものがあるということを述べている点である。しかし、その内容は、どちらかというと「日本的感性＝情緒」、日本人の伝統的美意識や伝統的ドラマトゥルギーとのかかわりを中心に取り上げられていた。

したがって、私としては、以下において、これまでとは違う読みの観点＝読解格子を用い、「ごんぎつね」という作品が孕んでいるところの「病理性」、あるいは、日本人の心の問題、日本人が陥りがちな生きづらさの病理について考え、さらに、以前から指弾されてきた「ごんぎつね」における物語としての「破綻」問題や「他者性の不在」問題にも踏み込んだ考察を試みたいと思う。

二、嗜癖する「ごん」――主人公「ごん」の人物設定の特質

科学的「読み」の授業研究会(読み研)が提唱した「構造よみ」の理論では、「説明」と「描写」という概念を用いて、文学作品における物語り構造の根幹をなしている時間叙述あり方を区別している。それによれば、「説明」とは、ある一定時間をまとめて書くことであり、「描写」とは時間の流れに沿って、起こった順序で、ありのままに書いていくことである、と定義されている。[2] これは、フランスの文学理論家ジェラール・ジュネットの概念でいえば「括復法」

「括復的物語言説」(récit itératif)――物語における出来事の頻度に対する語りによる処理の仕方のひとつで、数度にわたって生起した同一の出来事をひとまとめにする要約的な叙述のやり方のことである。ただし、ジュネットの場合は、ひとつのテキストの様々な所に現れる語り手の語りのスタイルとして取り上げられているのに対し、「読み研」における「説明」の方は、作品の全体構造のなかのプロット=事件の流れがはじまるための前段階あるいは前提条件の設定の意味合いに比重が置かれている。[3]

さて、「ごんぎつね」の主人公ごんの境遇や行動が、ある一定時間あるいは一定期間において常に反復的・継続的に生起していたことを叙述した「説明」の部分は次のところである(なお、「ごんぎつね」の引用は『新編新しい国語四年下』(東京書籍平成二十二年)を使用)。

> その中山から少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっぱいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入っていもをほり散らしたり、菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり、ひゃくしょう家のうら手につるしてあるとんがらしをむしり取っていったり、いろんなことをしました。

語り手は、本当にあのきつねには困ったものだという村人たちの嘆きを代弁しており、「ひとりぼっちの小ぎつね」という言葉にも、「小せがれ」「小利口」「小役人」などといった蔑称的なニュアンスと同時に、誰にも相手にされていない独り身のものに対する吐き捨てるような語り口が読み取られる。そして、「夜でも昼でも」「いたずらばかり」という語り手の語調には、ごんの度重なるいたずらに被害を受け、うんざりしている村人たちの深い感情的なわだかまり(「ごん」への恨みや怒りなど)が暗示されている

ごんの「いたずら」の例示には、もはや悪ふざけでは済まされない、「犯罪」の域となる「放火」(「菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり」)が挙げらており、「いたずら」として単純に苦笑する性質のものではなく、村人の立場に立ってみれば、村の平穏な日常生活を脅かす極悪な行為にほかならない。

では、なぜ、ごんは、強迫的なまでに、昼でも、夜でも、こんなにいたずらばかりしていたのか。ひとりぼっちだったから、さびしさを紛らわすため、孤独から来るイライラや不満を晴らすためなどなどが、ごく普通の解釈と言えるが、これでは深みに欠ける表面的なものに留まってしまう。この問題をめぐって、存外、教師以上に

子どもたちの方が、深い読み取りをしている場合がある。鶴田清司は、次のように指摘している。

「想像力によって〈ごん〉の状況を自分に置き換えてみたとき、なぜ〈いたずらばかり〉するのかというという問いに対して、「おこられているのが話しかけられているみたいで」とか「誰かに思ってほしかったから」という答え(作品との対話)が子どもの中に自然と生じてきたのである。その背景には当然、その子どもなりの生活経験(自分にも思いあたること)がある。人は誰でも、親や教師に叱られることをわざとやってみたり、好きな子の関心を引くためにわざと嫌われるようなことをやってみたり……という経験を多かれ少なかれ持っている。非合理的・非常識的な形でしか自分の存在をアピールしたりふれあいを求めたりすることができないという経験である。そうした経験がテクストとの出会いによって喚起されたのである。[4]

教室の子どもたちの中には、自らの経験に照らして、「ひとりぼっち」ゆえに、ごんが繰り返えす「いたずら」の意味を鋭敏に感じ取っている者も少なくない。ごんの「いたずら」の深い理由とは、被害を受けた村人たちと、とにかくかかわりたいというやり場のない思いからである。ごんにとっては、たとえ憎しみをかい、恨みをかってもよかった。極論すれば「殺意」からでさえもよかったかもしれない。自分の行為で村人たちが動揺すること、自分のいたずらで影響を受け「心動かす」人々がいることで、ごんは、またいたずらを繰り返す、自分がいたずらをしているかぎり、村人たちとのかかわりはつづき、村人から見捨てられることはないのだというように。

ところで、嗜癖行動の観点からすれば、ごんの「いたずら」は、いたずらをして他人が困るのを見て快感を得ようとする行為の習慣化＝悪習化、のめり込み(アディクション)としての行為関係嗜癖ととらえられる。これは、窃盗、落書き、放火などへと嗜癖した「愉快犯」(世間を騒がせて楽しむ犯罪)の行動ともいえるものである。ごんのいたずらは、生きていくために止むにやまれず、表十の「びく」をぶちまけたのではない。兵十の苦労してとらえた獲物を逃がし、兵十を困らせて、精神的苦痛を与えているだけだった。

「共依存」は、けっして対等なコミュニケーションといえるものではない。いわば「歪んだコミュニケーション関係」としての「パワーゲーム」に他ならない。それは、「ひとりぼっち」の惨めさをのがれるために強迫的なまでに「いたずら」を繰り返し、何としてでも村人たちの関心・注意を惹かせようとする権柄づくの行為でもある。ある意味では、「だだっ子」の振舞いによく似ている。親を

こまらせて、手足をバタつかせて駅やデパートで泣きわめき自分の要求を実現しようとするあの実力行使の振舞いである(教室の子どもたちの読み取りの深さの背景には、ごんぎつねの「いたずら」の振る舞いが自らの「だだっ子」体験の「棚卸し」を促したものとも考えられる)。

こうした行為嗜癖と同様に、ごんにみられるのは、絶えず村人たちを困らせては注意を自分に惹かせ、困らせることで相手をコントロールし、言うことを聞かせようする「共依存」という関係嗜癖の側面である。その関係構造は「支配―被支配」、「上か下か」といったどちらかが優位であるような競合関係・力関係を作り上げている。それ故、第三者(「三人称」)は介入せず、「汝―我(あなた―私)」の二人称的で閉鎖的な「対」の関係構造を保持し、この関係はしばしば、血で血を洗う愛憎にみちた「パワーゲーム」の様相となる。

たとえば、親子関係において発生する家庭内暴力(あるいは摂食障害、自傷癖、薬物依存などの嗜癖行動の形をとる)は、親が子どもを支配、コントロールし(世話を焼き)、「期待」「家族シナリオ」で子どもを縛ってきた反動として起こると言われている。親の期待に答えられなかった罪悪感あるいは親によって自分の人生に侵入された恨みから、今度は、物を壊したり、親に暴力を振るい、「どうして俺を生んだんだ」といった返答不可能な問いかけ=暴言で、親を困らせて、親を支配していく。親が一旦、その子どもの理不尽な「テロル」による要求を飲み、それに屈してしまうと、暴力・暴言は堰を切って親に繰り返し襲いかかり、歯止めが利かなくなる。こうしたエスカレートしていく子どもの「暴力嗜癖」によって、家庭内は阿鼻叫喚地獄と化す。しかし、多くの精神医学者やカウンセラーが指摘するように、こうした息子や娘の問題行動は、すべて家庭内だけにとどめられ、封印され、第三者や世間の目にはさらされることはないという。つねに、家族という閉鎖的な「対」の関係の中で完結し、その中に隠蔽されてしまうのだ。そして、この閉鎖空間の中で、再度、親による実力行使が子に襲いかかるという悲劇も起きる。[5]

このように、今日では、とくに、家族関係における支配―被支配の力関係について「共依存」の問題が頻繁に取り上げられるが、周知のように、「ごんぎつね」の作品舞台は、「中山様というおとの様」が統治していた時代の、農村であり、主人―奴隷、武士―農民、地主―小作人などの封建的な支配関係や身分制度、家父長関係が厳然として君臨した時代を背景としている。この点からすると、西郷竹彦がいうように「封建時代の出来事」であるが、封建時代の強固な力関係・支配関係の中で、あえて「昼夜でも昼でも、辺りの村へ出

てきて、いたずらばかり」していたごんの嗜癖行動は、すでに、遅かれ早かれ殺されることが運命づけられているような「自己破壊的」行動となっていたといえる。これは経過がゆるい「慢性の自殺」である。ごんには、その行動の意味がわかっていただろう、いたずらを続けていけば、やがていつか殺されると。しかし、とまらなかった。いわゆる「わかちゃいけど、やめられない」という緩慢で慢性の自殺にごんは溺れているのである。これが嗜癖行動なのである。

三、「いたずら」から「つぐない」へ——自己処罰としての自己放棄＝自己犠牲

ごんの性格特性については、その「頭の良さ」「思慮深さ」が引き合いに出される。以下の引用にあるように、「なんだろう、秋祭りかな。祭りなら、たいこや笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが。」という箇所では、ごんは論理学でいう「背理法(帰謬法)」による推論を使っている。秋祭りが真であると仮定すると、秋祭りの指標である「たいこや笛の音」、お宮に「のぼり」が無い。ゆえに、秋祭りという仮定は真ではなく偽である。ごんの思考は、実にみごとな論理的推論のお手本になっている。

> 「ふふん、村に何かあるんだな。」と思いました。「なんだろう、秋祭りかな。祭りなら、たいこや笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが。」
>
> こんなことを考えながらやってきますと、いつの間にか、表に赤いいどのある兵十のうちの前へ来ました。その小さなこわれかけた家の中には、大ぜいの人が集まっていました。よそ行きの着物を着てこしに手ぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きななべの中では、何かぐずぐずにえていました。
>
> 「ああ、そう式だ。」と、ごんは思いました。「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

周知のように、ごんは、物語の中で、人間の言葉は聞き取り理解できるが、一言の肉声も人間に対して発していない。当然、肉声で話せたとしても撃たれたり殺される境遇にあった。「ごんぎつね」全体を通して、ごんの言葉はすべてごんの「心の声」「心内語」であり、それらがカギ括弧に括られて、「直接話法」のように表記されている(大日本図書の校本新美南吉全集と教科書と一部表記の違いがある)。たとえば、「一」の場面で、川に入って何かしている人

を見たとき、「『兵十だな。』と、ごんは思いました」という表記になっているが、ごんは、心の中で「思いました」というかたちで「兵十だな」と心の声を呟いていることに注目したい。このことからも、声に出して呟くことさえできないごんの立場や境遇の問題が改めて浮き彫りになってくる。「『兵十だな』と、ごんはつぶやきました。」ではないのである。

このようなカギ括弧の使い方。これは、「ごんぎつね」の文章表現上の特徴を考える上で蔑ろにできない点であると思われる。普通、一般には――学校現場の国語の授業では特にそうだが――、カギ括弧は、会話や音声的対話を表記するものと考えられている。しかし、「ごんぎつね」においては、ごんの具体的な思考の動き、「心の声」「内的発話」を「直接話法」のかたちで描出するために使われているのである。カギ括弧が使われていながら、「と思いました」となっているいくつかの個所について、童話という作品の性格上、幼い読者にわかりやすくしたのではないかという類推もできるが、ごんの思考や心の動き、内面的なモノローグを直接話法的につぶさに伝えようとする表現上の仕掛けとも考えることができる。その意味で、この仕掛けは、単なる知覚的な視点だけにとどまらず、ごんの「心の眼差し」あるいは「意識の流れstream of consciousness」をも描写する技法ともなりえているのではないかと考えることもできるだろう。[6]

また、最後の「六」を除いて、ほとんど作品全体にわたって、読者にはごんの「心の声」がカギ括弧で括られて直接話法の形式で聞かされることにより、そのため、読者のごんへの感情移入や同化、思い入れは否が応でも強まるものとなる。

思慮深いごんは、「表に赤いいどのある兵十のうちの前へ」来たとき、貧しい兵十の家のただならぬ様子を知る。「ああ、そう式だ。」「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」と、ごんは心で呟く。実際、この時、ごんが、兵十のうちの家族構成をどう理解していたかは書かれていないが、「兵十のうちのだれが」と考えていることからも、兵十には少なくとも同居人がいることをごんも分かっていたと思われる(「三」の場面に入って、兵十は「おっかあとふたりぐらし」であったことが語られる)。しかし、その呟きには、大きな不安と怖れがあった違いない。ごんの心には、死んだのは、もしや「兵十」ではないかという思いがよぎっただろう。思慮深く、仮説的推論に巧みなごんであればこそ、この時、ごんは兵十の死をも想定していただろう。ごんはどうしてもそれを確かめずにはいられなかった。

> やがて、白い着物を着たそう列の者たちがやってくるのが、

ちらちら見え始めました。話し声も近くなりました。そう列は、墓地へ入ってきました。人々が通ったあとには、ひがん花がふみ折られていました。

　ごんは、のび上がって見ました。兵十が、白いかみしもを着けて、位はいをささげています。いつもは、赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていました。

「ははん、死んだのは、兵十のおっかあだ。」ごんは、そう思いながら頭を引っこめました。

　そのばん、ごんは、あなの中で考えました。「兵十のおっかあは、とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから、兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのまま、おっかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら死んだんだろう。ちょっ、あんないたずらしなけりゃよかった。」

文字にして約二百字の右のごんの内省の言葉については、「ひとりよがり」「自分勝手」「独断」「恣意的」などと評されても仕方がないものがある。かなり強引な当て推量ではある。「ちがいない」が二度使われ、強引に自分に言い聞かせるように思い込もうとしており、「だろう」という言い方も単純素朴な類推にすぎない。実際、〈兵十の川での漁〉、〈ごんのいたずら〉、〈兵十のおっかあの死〉といった事実を、ごんは、何の根拠・裏付けもなく勝手に自分の頭の中でつなぎ合わせてひとつの物語に仕上げているにすぎない。まず、ごんは、兵十がはりきりあみを使い漁をしていたのは、病床の母に、うなぎを食べさせるためという目的と意図をもった行為であったと考え、さらに、病気で弱っていく兵十の母親が「精のつく食べ物＝うなぎ」を口にするのを自分はいたずらして妨害し、衰弱死させてしまったのだと捉えた。「ちょっ、あんないたずらしなけりゃよかった。」と深い後悔の念にごんは襲われる。しかし、この後悔も、ごんのひとりよがり、思いこみに過ぎない。ごんは、この物語に自らを縛り、この物語を生き、また、これに生かされ、そしてそれに殉じていったといえるのだが、では、一体、ごんはなぜこんなひとりよがりの筋立て・物語を作為したのか。そうまでして何を賭けたのか。何がしたかったのか。

　先の引用にもう一度戻ってみよう。

　ごんが、いつもと違う村人たちの様子や行動が、兵十の「おっかあ」の葬式のためだったと気づく。そして、ごんの目には、普段とはまったく違った兵十の姿、兵十の様子が飛び込んできた。「白い

かみしもを着けて、位はいをささげ」、「いつもは、赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれてい」たのだ。彼岸花は踏み折られ、兵十は悲しみに萎れている。ごんの目の前に広がる世界は、突如として変貌してしまった。わけのわからない混乱と痛みがパニックのようにごんを襲う。世界は急変してしまった。いったいどうやって生きていったらいいのか。

ごんは、その晩、穴の中で、必死に混沌となった世界の秩序を再建しようと試みた。その論理は、至極単純にして過激な方法だった。「すべては自分のせい」「すべて自分が悪い」とすること。すべてを自分のせいにすれば、そこに新しい秩序・世界ができあがる。世界秩序の生成は、自分が原因でひきおこされる。[7] ごんの後悔の物語は、自己全能感の裏返しである過剰な自責感、罪悪感、あるいは厳しい自己処罰に基づいていた。そして、その結果、新たな物語が紡ぎだされる。ほかでもなく、「つぐない」の物語である。ごんは、「いたずら」をやめ、兵十をケアする「つぐない」という嗜癖行動をスライドさせていく。まさに、殺してくださいと言わんばかりに、「自分のせいだ」「自分がみんな悪いんだ」という罪責感にとらわれて、ごんは、「うなぎのつぐない」にのめり込み、嗜癖していったのである。

ところで、この穴の中でのごんの思考については、ごんの身勝手な「思いこみ」として、研究者や学校現場の教師、子どもなどの間で、問題にされてきたところである。

この問題をめぐって、最も早くラディカルに取り上げ批判し、「ごんぎつね」の教材としての価値を疑問視したのは、一九六五年の大河原忠蔵の発言である。大河原は次のように述べている。

新美南吉『ごんぎつね』のことになりますが、わたしは、必ずしも、いい教材だと思っておりません。ともうしますのは、この作品は、一つの破綻をもっている作品だというふうに思うわけです。

で、どういう点で破綻をきたしているか、というと、最後に、兵十が銃をうつとき、うたなければならない必然性というものは、ごんの解釈の中から出てきているわけです。ごんぎつねが、自己を主張して、いろいろ状況を解釈しているわけですが、その解釈の中から出てきています。

ですから、われわれがその作品を読んでいますと、ごんの解釈が、いつのまにか、兵十のうたなければならない必然性にスライドして、われわれは、そのトリックにかかって、そして、うたなければならないのは、なるほどこういうわけかというふうな、錯

覚におちいっているわけですね。非常にこれは、トリックのうまい作品だと思うんです。

そのためにですね、結局は、最後にだまされて、かわいそうだということになるし、あるいは、この作品に対して、またこんな解釈があります。つまり兵十とごんのミゾは、断絶は、死をもってしか埋めることはできなかった。これは、現在も、死をもってしか埋めることのできない人間の分裂、あるいは疎外ということに対応している――という理解です。[8]

大河原が右の引用の中で言っている「解釈」と「必然性」という言葉は、かなり省略的な言い方で理解しづらいが、結局のところ、ごんの恣意的な「解釈」が必然的に「死」＝射殺に直結したのだということである。これが、「ごんぎつね」という「作品に破綻があって有効性をもたぬ素材」の主張する根拠に挙げられていた。大河原のこうした指摘は、「ごんぎつね」の作品分析や解釈において重要な問題提起ではあったが、全体の趨勢としては、「ごんぎつね」が、「国民的教材」となっていくなかで、大河原の提起した論点は、ほとんど不問に付され、封印されてきたように思われる。いわば、「それには触れないでおこう」という暗黙の了解、「それを言ってはおしまい」という教材擁護の姿勢が根強く浸透していったといえるだろう。

しかし、大河原の発言には、省略された言い回しがあり、これがわかりにくくさせているところとなっている。たとえば、「ごんの解釈が、いつのまにか、兵十のうたなければならない必然性にスライドして」という見解は、あまりに端折りすぎている。やはり、どんな場合でも、ただ考えたり解釈したりだけでは何も起こらないのであって、ごんの具体的な行動＝「うなぎのつぐない」（くりやまつたけを兵十の家にもってくること）の強迫的な反復があり、その果てに、ごんは射殺されたのである。いわば、ごんの強迫的な嗜癖行動、これが生み出されたごんの内面的なあるいは精神的な（霊的な）必然性を問題にする必要があったのではないかと私は思う。この点をしっかりとテーマ化すれば、「ごんぎつね」は、けっして「破綻」とした作品とはいえないように思う。

四、兵十をケアするごん

「二」の場面の最後のところで、ごんは穴の中で、「いたずら」したことを悔い、兵十の「おっかあ」の死を「自分のせい」だと考える。そして、「三」の場面へと移り、ごんの「うなぎのつぐない」の行動がはじまることになる。

兵十が、赤いいどの所で、麦をといでいました。
兵十は今まで、おっかあと二人きりでまずしいくらしをしていたもので、おっかあが死んでしまっては、もうひとりぼっちでした。
「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」
こちらの物置の後ろから見ていたごんはそう思いました。
ごんは、物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかでいわしを売る声がします。
「いわしの安売りだあい。生きのいい、いわしだあい。」
ごんは、そのいせいのいい声のする方へ走っていきました。
と、弥助のおかみさんが、うら戸口から、
「いわしをおくれ。」
と言いました。いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を道ばたに置いて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持って入りました。ごんは、そのすき間に、かごの中から五、六びきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十のうちのうら口から、うちの中へいわしを投げこんで、あなへ向かってかけもどりました。とちゅうの坂の上でふり返ってみますと、兵十がまだ、いどの所で麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

二段落目は、語り手が兵十の視点、内面に寄り添い代弁する叙述、いわゆる「自由間接話法」の表現となっている。その指標としては、「今まで」というダイクティク＝絶対的時間副詞が重要である。「兵十」の「いま・ここ・わたし」という時間的場所的現在と、語り手・語りの時間との共存、作中人物の声であると同時に語り手の声でもある「声の二重性」が見られる。また、「おっかあ」という親族呼称、「死んでしまっては、もう」といった表現にも兵十の声に近いものが感じられる。

語り手は、ここで、ごんの一方的な孤立性・孤独＝「ひとりぼっち」と釣り合いをとらせるかのように、母との死別後の兵十の「孤立性」「孤独」を読者に示し、また、ごんもそれを認知したという構成にしている。孤独なものが、またふたたび孤独なものを再生産してしまったという加害者意識と同時に、「孤独」「ひとりぼっち」といった共通性を介した「おれと同じ…」同等意識がはっきりと出て、ここから、まさに「うなぎのつぐない」がはじまるのである。しかし、あくまでこれ以降、ごんの視点となるので、ごんの側からの一方的な〈われわれ〉感＝連帯感にとどまっている。見かけとして

は、兵十は、母親が死んで、「おっかあ」との「二人暮らし」の生活を失い、ごんと同じ独り身となっている。しかし、兵十の「ひとりぼっち」も、ごんの側からの一方的な解釈によっており、その「ひとりぼっち」の質的な問題については、兵十の側から考え直す必要があると私は思う(ごんと兵十との「ひとりぼっち」の質的差異については、後で取り上げる)。

さて、「三」の場面。ごんの行動は、強迫的な「いたずら」から強迫的な「つぐない」へと変貌する。「二」の終わり、ごんは穴の中で、「いたずら」したことを悔い、兵十の「おっかあ」の死を「自分せい」だと考える。ごんに「いたずら」を止めさせたものは、ごんの心の中に強く芽生えた「自分のせいだ」「自分がみんな悪いんだ」という過剰なまでの罪責感、罪悪感、自己処罰願望であった。しかし、その罪責感の内実は、裏返せば、過剰な自己全能感の裏返しであり、ごんは、「いたずら」という嗜癖をやめはしたが、今度は、兵十をケアし、共依存する「つぐない」という嗜癖行動へとスライドしていく。共依存は、自他の境界線を侵犯する病といわれるが、人間界と動物界(府川は「兵十=表の世界」と「ごん=裏の世界」と呼んでいる[9])という境界線をこえて、まさに殺してくださいと言わんばかりの処罰願望に満ちた自己破壊的行為へのめり込んでいったのである。

「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」とごんが思ったとき、ごんは、兵十との境界を超え、兵十の物語を取り込む。みんな自分が悪いのだ、という過剰な罪責感にとらわれているごんには、自分を消すこと、自分であること、自分のみじめさを思い出すことは苦痛でしかない。それゆえ、ごんにしてみれば、いかにみじめな自分でもあろうと、なんとかして生きていくとすれば、主体的でない生き方=自己を忘却(自己犠牲)の物語を必要とせざるをえず、自己の物語を捨て、兵十の物語に乗り移ったのである。

ごんの「つぐない」は、「いわし売り」のかごから、数匹のいわしを盗み、兵十の家になげこむことから始まっている。この行為は、嗜癖行動(アディクション)を実に端的に物語るものとなっている。なぜなら、嗜癖とは、優先順位に対する理性的な認識を失う行動であり、この場合、ごんは「窃盗」という犯罪よりも、「つぐない」ということを優先させているからである。だからこそ、ごんは手段を選ばない窃盗であっても「いいことをした」と思うのであり、最終的に、兵十がいわし屋に泥棒扱いされて殴られ顔に傷をつけていても、ごんは、兵十を「かわいそうに…」と思って、後悔に駆られるだけで、「いわし」の窃盗という社会的な法規を犯したことについてはなんら悔い、反省していないのである。

ごんは、これはしまったと思いました。「かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんなきずまで付けられたのか。」

ごんはこう思いながら、そっと物置の方へ回って、その入り口にくりを置いて帰りました。

次の日も、その次の日も、ごんは、くりを拾っては兵十のうちへ持ってきてやりました。その次の日には、くりばかりでなく、松たけも二、三本、持っていきました。

貧しい兵十の生活に、毎日のように栗や松茸といった糧を提供する、この献身的な「つぐない」は、ごんの「傲慢」を潜ませている。それは、兵十に常に影響を与えているという傲慢である。つまり、「おれは兵十の生活を支えている」「おれがいなければ兵十は困るだろう」という、「ケア」による共依存特有のコントロールと支配が隠れているのである。「うなぎのつぐない」が、エスカレートしていけば、ごんは、自分のケアがないと兵十は生活できない、自分のケアこそが兵十を支えているのだという思い上がった全能感を持つにいたるだろう。兵十への「つぐない」というケア。それは、とにかく「いいこと」なのだ。

アディクション問題の専門家である信田さよ子は、共依存によるケアという行為につきまとう感覚には、「自分がひとりの人間を生かしているという所有と支配に満ちた感覚」[8]があるという。ここで、重要な点は、兵十をケアする「つぐない」は、ごんにとって、善行（「いいこと」）を積む行為であると同時に、兵十を支配・コントロールする行為だったことである。だが、これまで「ごんぎつね」解釈においては、もっぱら前者の善行を積むごんの姿だけにスポットが当てられてきたのではないだろうか。私としては、ごんの「つぐない」がもつ二面性、とくにその善行の裏に隠された「共依存」の側面に光を当てたいと思う。

なるほど、これまで、私自身も一読者としてそうだったのだが、常々、「ごんぎつね」のリアリティーを支えているのは何かと考えるとき、何んと言っても、小ぎつねのごんが来る日も来る日も坦々と「つぐない」という善行を積み、罪滅ぼしをしていく、その健気な姿にあった。この姿が読者の心を打ち、哀切感を惹起してきたと私は思う。とりわけ、われわれ日本人は、その健気さに、「献身」「自己犠牲」、「奉仕」「愛他的行為」といった日本人および日本文化が価値づけ評価する行為を垣間見る。私たちの「ごんぎつね」にかかわる感動体験には、このごんのひたむきで健気な「つぐない」という善行の持つ文化的意味合いが大きく働いているのである。

とはいえ、ごんの「つぐない」のあり方を、兵十へのケアとして

「共依存」の観点から捉え直してみると、人間関係・人物関係における支配、コントロールの問題、いわば私たちの日常の中にいまだに巣食う封建遺制的ともいえる人間関係の問題性が浮かび上がってくるのである。

五、ごんの共依存的特性――「世話焼き」「恩着せがましい」「子ども扱い」

さて、一般に、嗜癖行動は、次の三つのタイプ「物質嗜癖」「行為過程嗜癖」「関係嗜癖」に分類される。まず、薬物、アルコール、食べ物、たばこ、など物質にのめり込み、依存していく「物質嗜癖」は、具体的には、アルコール依存症、薬物依存症(麻薬、覚せい剤、風邪薬、シンナーなど)、過食や拒食、食べ吐きなどの摂食障害がこれにあたる。次に、「行為過程嗜癖」は、ある行為のプロセスに依存し、執着していくタイプ。パチンコ、競輪、競馬などのギャンブル依存、買い物依存、暴力嗜癖や万引きなどの盗癖、のぞき、痴漢行為がこれに含まれる。ちなみに、ヘッセの「少年の日の思い出」において問題行動として描かれる「僕」の寝食を忘れて「チョウの採集」にのめり込む行動――強迫的な収集癖はまさにこのタイプの嗜癖行動といえる。最後の「関係嗜癖」とは、特定の人間関係にのめり込み、執着するタイプで、「共依存」、「恋愛依存(性依存)」がある。とくに「共依存(co-dependency)」は、他者を操作・コントロールして他者に寄生し、関係嗜癖の典型的なものである。アルコール依存症治療を通してアメリカの精神医学会で見出されていった概念として知られている。アルコール依存症の夫に対してとる妻の世話焼き、子ども扱いといった態度・行動が、逆に、夫のアルコール依存を支え、援助していることが明るみになり、この概念が注目されるようになった。[1] 自分への関心＝自立を放棄して、他者＝夫・娘・息子などのコントロールに嗜癖(のめり込み)し、他人の人生によって自分の人生を満たそうとする行動であり、愛情や献身、自己犠牲という愛他的善行の美名に覆われた支配・コントロールとなる。他人との境界がなく、介入・侵入する世話焼きで、表面的には、他人思い、他人につくすタイプとして評価される。たしかに、傍目には献身的、殉教的な姿と映るので日本的風土では評価されて見られがちである。相手のことが気になり、面倒を見たがり、他人のためだけに生きる人生をたどるのである。共依存者とは、「他人の世話焼きに没頭し、自分の真の必要(欲望)がわからなくなってしまった人」(斎藤学『家族依存のパラドクス』新潮文庫二〇一二年　五十一頁)と言われる。

こうした行為は、支配・コントロール欲求に基づいているがゆえに、しばしば何らかの形で自分の行為の返礼・報酬を得ようとする。

いわゆる「恩着せがましい」行動をとる傾向にある。「私がお前のためにこんなに苦労しているのに、どうしてお前は私の言うことをきかないのか」という、よく親が子供に向って言う言い方がいい例である。その一方、相手に尽くしているのに相手から何も返礼がないことで、悲しみ、抑うつ感あるいは憎悪や怨恨を覚える面をもってもいる(ごんのあの慨嘆が典型である——ごんは、「へえ、こいつはつまらないな。」と思いました。「おれがくりや松たけを持っていってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃあ、おれは引き合わないなあ。」)

ごんのセリフのなかには、コントロール、恩着せがましさを忍ばせた「やる」という共依存語彙ともいえる言葉がでてくる。「次の日も、その次の日も、ごんは、くりを拾っては兵十のうちへ持ってきてやりました」「おれがくりや松たけを持っていってやるのに、そのおれにはお礼を言わないで…」

この「やる」という言葉がごんのセリフに出てくることで、違和感あるいは不快感を感じるという感想を私は、今から二十年近く前、大学院に学ぶ現職推薦の小学校教員から聞いたことがある。はっとするような思いがしたことを今でも覚えている。この「やる」という言葉に着目することによって、私には、すくなくとも二つの疑念が湧いてきた。ひとつは、語り手が言うところの「うなぎのつぐないい」とはいったいなんだったのかという思い、もうひとつは、そこから派生する物語としての整合性が大きく揺らいだことである。しかし、ごんの兵十へのつぐないというものが、他者に恩を着せることで他者を支配・コントロールしようとする共依存に基づいた行動と考えれば、疑念は晴れていく。したがって、「おれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃあ、おれは引き合わないなあ」という嘆きともつながるのである。そもそも、「ごんぎつね」における「つぐない」には、償いの本質である「無償性」が担保されてはいない。近代文学研究者の鈴木啓子は、ごんの償いは謝罪を目的に行われておらず、ごんの兵十への贈り物には、お礼を求める心、認知と応答を求める心が潜んでいたと指摘している。たしかに、鈴木がいうように、「謝罪の品にお礼を言われてしまっては謝罪は成立しない[12]」。

私たち読者は、語り手による「うなぎのつぐない」という言葉にごまかされ、騙されてしまったような印象を覚える。語り手はごんと共謀して、あるいはごんを庇って、読者を騙しているともとれる。そのため、「つぐない」の物語に捕らわれる読みから、「求愛」の物語、友情、コミュニケーション、心の通い合いへの希求の物語、「互いが互いを認知し合った特別な関係への志向・拘泥」へと大きくシフトせざるを得なくなる。「ごんは、うなぎのつぐないに、ま

ず一つ、いいことをしたと思いました」という文は、あきらかにごんの思いを語っていると考えれば、ごん自ら「つぐない」という言葉で、自分を騙し、自分の共依存に蓋をし、否認しているのである。信田さよ子は、「共依存は弱者を救う、弱者を助けるという人間としての正しさを隠れ蓑にしての支配である」[13]と述べているが、まさに「ごんぎつね」では「つぐない」がごんの共依存の「隠れ蓑」の役割を果たしているのである。そして、兵十を救えるのはおれだけだ、おれは兵十の救世主だ、という全能感とそれにともなう凄まじい自己肯定感へ陶酔していくのである。

これに関連して、草稿では、「うなぎのつぐない」という言葉はなく、「何か好い事をした様に思へました」とあるだけである。鈴木がいうように、「善悪の判断ではなく「好い」と主観的判断を示す表記」になっている。

共依存の大きな特徴のひとつは、寄りかかる他者が必ず自分より弱い者、弱者だということである。したがって、〝赤ん坊〟は無防備な存在であり、親などの他者からの世話・保護なしには生きられないため、共依存を必要とする弱者の典型と言える。この弱者化こそが、「子供扱い」することなのである。共依存者は、アンテナを張り巡らすようにして、弱者を探し、弱者を選ぶ。他者の少しの恥辱、気遅れ、不安、後ろめたさ、弱気などなど、あらゆる弱みを瞬時に見抜き、〝標的〟にする。「一」の場面で、ごんに「いたずら」のスイッチが入るのも、川の中で漁をする兵十の姿に気づいたからだった。

> ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうっと草の深い所へ歩きよって、そこからじっとのぞいてみました。
>
> 「兵十だな。」と、ごんは思いました。兵十は、ぼろぼろの黒い着物をまくし上げて、こしのところまで水にひたりながら、魚をとるはりきりというあみをゆすぶっていました。はちまきをした顔の横っちょうに、円いはぎの葉が一枚、大きなほくろみたいにへばり付いていました。

また、弱者化の究極ともいえるのは、赤い井戸のところで麦をとぐ兵十を見て、ごんが「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」と思ったときである。そして、弱者＝兵十を「ケア」するために、ごんは「いわし」を盗む。窃盗を犯してまで兵十という弱者の「ケア」が優先される。この盲目的な振舞いが、まさに共依存的な弱者救済行動の姿なのである。だから、兵十がいわし屋にいわし泥棒と間違

えられて殴打され、傷を負っても、ごんは、「これはしまった」と思いながらも、「かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんなきずまで付けられたのか。」と、とにかくケアすべき「かわいそうな」弱者＝兵十のことしか頭にないのである。

鈴木啓子は「ごんが償おうとしているのは、兵十の母親の命でも、悪戯の罪でもなく、死によって断たれた兵十の母親への愛」ではないかと述べ、ごんの繰り返される「贈り物」は、「兵十の母親への愛を代行」したのだとしている[14]。つまり、病臥にあえぐ母へせめておいしいもの、精のつくもの(うなぎ)を食べさせたいという兵十の母思いの心、癒しへの願いが、自らのいたずらによって阻害してしまったことを悔いて、ごんは兵十の母への愛を代行あるいは模倣したということになる。

しかし、私は鈴木の解釈とは違い、ごんは「兵十の母への愛(欲望)」を代行したというよりも、むしろ端的に、「兵十の母」を代行したのであり、母の兵十への愛・欲望をを模倣したのだと考える。なるほど鈴木は、「いわしをおくれ」と「弥助のおかみさん」が「わざわざ鰯屋を呼ぶ声」が語り手によって語られていることを取り上げ、鋭い指摘をしていた。また鈴木は、弥助の妻の声を語り手が響かせたのは、兵十のために「鰯を買って食べさせてくれる妻や母親がいないことを喚起」する効果を高め、ごんは「弥助の妻をまねるごとく[15]」鰯を兵十の家に投げ込んだのだと述べている。だが私としては、「弥助の妻」ではなく、「兵十の母親をまねるごとく」の方がしっくり収まる。兵十が失ったものは、母親であり、これまでの「おっかあとのふたりぐらし」の生活の中に響く「母の声」である。兵十の母親を代行し、模倣することによってごんの行動は、ある意味で、日本文化に根強く存在する「母なるもの」、信田さよ子の言葉を使えば「母の無謬性[16]」を獲得し、兵十への完璧な共依存、共依存的ケアを貫徹していくのである。

六、ごんの「ひとりぼっち」と兵十の「ひとりぼっち」

さて、兵十とごんの「ひとりぼっち」、その孤独の質的な相違点(質的差異)に関して考えてみよう。母親を亡くした兵十は、ごんと同じように、独り身とはなったが、決してごんのように孤立してはいないことに注意しなければならない。

兵十は、なによりも村人たちの互助により母の葬儀を出していた。村人たちは冠婚葬祭のしきたりに則り、手分けして葬儀の支度を整え、兵十を支え、粛々として伝統儀式を執り行っている。他方、兵十も村落共同体の一員として、葬儀の担い手としての務めを果たしていた。兵十は独り身であるが、孤立しておらず、それゆえ孤独ではなかったともいえる。

またさらに、鈴木が的確に指摘したように、この「四」と「五」の場面、いわゆるお念仏に行く兵十と加助、そのうしろをこっそり追っていくごんが描かれている場面について、ごんが思っているほど、また語り手が語っているほど兵十は「ひとりぼっち」ではないことが明かされている。実際、兵十は、お念仏[17]、「念仏講」と言われる共同体の宗教的儀式に、加助という友達と連れ立って参加している。私はこのお念仏について、単なる死者の供養とだけとらえたくない。それは貧しく多忙な生活の中からわずかな時間を捻出して、村人たちが集まり、言葉を交わし、悩み、体験、出来事を分かち合うコミニティーであり、また霊的な癒しの場ではなかったかと私は思う。当然、当時の農村であれば、兵十と同じように母に死なれた独り身の境遇の男たちもお念仏に来ていたことだろう。生活の苦労を聞いてもらい、分かち合い、共感し合う場としてお念仏は大切な役割を担っていたのである。兵十の友人である加助は、まさに浄土真宗でいう「妙好人」の資質さえ感じさせるものがある。お念仏への行きも帰りも加助と兵十は一緒であり、兵十が不思議な体験を素直に打ち明けた時も、笑わず馬鹿にせず、真摯に受け止め共感し、念仏の間中も考え続けている。そして、兵十に対して、次のように言う。

「さっきの話は、きっと、そりゃ、神様のしわざだぞ。」
「えっ。」
と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。
「おれはあれからずっと考えていたが、どうもそりゃ、人間じゃない、神様だ。神様が、おまえがたった一人になったのをあわれに思わっしゃって、いろんな物をめぐんでくださるんだよ。」
「そうかなあ。」
「そうだとも。だから、毎日、神様にお礼を言うがいいよ。」
「うん。」

何度も「神様」という言葉が発せられ、加助の信心深さが伝わってくるが、率直に言って私は、このアドバイスの見事さに打たれる。そのアドバイスの適切さには、素朴な信心だけではなく、多くの人たちと体験を分かち合い、様々な悩みに共感してきた加助の並々ならぬ霊性の発露がある。

そもそも、兵十の悩みと困惑は、「おっかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれにくりや松たけなんかを、毎日毎日くれるんだよ。」というものだった。いったいだれがこんなことをするのかという困惑に兵十は囚われ、悩んでいた。村人のだれがこんなことを、あの人か、この人か、と兵十は、他人の顔色をさぐっていたに

違いない。そして、これが高じれば他人に振り回されて、生活が軋みだすことにもなるだろう。だれがだれがと考えて、人間関係に兵十は拘泥し悩むようにもなるだろう。これに対して、加助のアドバイスが適切なのは、人間関係の次元ではなく、「神様」という垂直の超越性によって水平的な人間関係における困惑を防ごうとしているからである。だれがやったんだという拘泥を捨て、素直に「神様の仕業」として受け入れることで兵十の困惑や混乱が解消していく方途が示されているのである。

七、ごんの共依存の貫徹——兵十の神様となるごん

加助の兵十へのアドバイスをごんはこっそり聞いていた。この事実は物語のプロットにおいて決定的に重要である。ここで問題になるのは、

> 「ごん、おまえだったのか。いつもくりをくれたのは。」
> ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

と、ごんがうなずいたのは、通じ合えたことを意味しているのかどうかということである。果たして教科書の指導書等にあるように「死をもって通じ合えた」のか。この今わ際に、ごんと兵十の間で「通じ合えた」のは、「おっかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれに、くりや松たけなんかを、毎日、毎日くれるんだよ」という兵十の謎に対する加助の提示した「神様のしわざ」が否定され、神様ではなく、ごんだったという事実が判明したことだった。この場合、通じ合うためには一番重要な事項、すなわち、くりや松たけをもっていった「ごんの動機＝うなぎのつぐない」（また、「神様にお礼を言うんじゃあ、引き合わない」という嘆き・無念さが解消されたこと）については兵十にはもはやごんの死によって永遠に知る由もない。したがって、最終章における視点人物＝兵十の立場からの〈読み〉に重点を置いた指導を推し進めていけば、意思疎通の不成立の悲劇が前景化され、ごんの独りよがりの思い込み、まさに共依存が引き起こした悲劇となる。

兵十の声に、ごんが、ぐったりと目をつぶったまま、うなずいたとき、「神様のしわざ」は、実は「ごんのしわざ」だったと兵十に判然となる。ごんは、兵十のあずかり知らぬところで、自己犠牲の演技に酔い・嗜癖し、身勝手に殉教したのだ。しかし、その死によって、ごんに超越性がもたらされる。ごんは「神様」へとスライドし、兵十を見下ろし、死後もなおも兵十をコントロールするだろう。ごんを射殺した罪責感・罪悪感が兵十にとりつき、兵十を飲み込んでいく。

兵十はごんの「墓守」となり、ごんを見上げつづけていくのだろうか。

八、むすび

「ひとりぼっちの小ぎつね」ごんは、母を亡くした独り身の兵十の母親役を演じ続けた。小狐が過酷な生存環境を生き抜くためには、さらなる弱者である兵十をあたかも分身でもあるかのように仕立て上げ、共依存することが不可欠だった。頼まれもしないのに、栗や松茸を届け、「もっていってやりました」「もっていってやるのに」と恩着せがましいごん。世話してやった、めんどうみてやったのになぜ俺の思い通りにならないのかと慨嘆するごん。そして、死んでもなお兵十をコントロールしていくごん。

こうした「ごんぎつね」おける共依存の病理は、これまで、「ごんぎつね」における「一方的な甘え」（府川源一郎）、「他者感覚の欠如」「他者の不在」「他者認識の甘さ」という言い方で指摘されてきたこと密接にかかわっている。しかし、さらに、私としては、こうした問題は、「他者の抑圧」「他者支配」という関係嗜癖（共依存）の観点から掘り下げる必要があると思う。実際、表面的には崇高ともいえるごんの「つぐない」や献身や自己犠牲の行為は、いわゆる日本の伝統的価値観、美意識、「母性信仰」とも重なる面が多く、私たち読者の解釈を振り回してきたのではないだろうか。

本稿の主眼は、まず、そういった価値観や美意識の覆いや隠れ蓑をはぎ取り、その下に隠されてきた「共依存という関係嗜癖の問題」を析出することあった。善意や善行の名のもと、本人すら十分気づけない覆い隠された動機がしみ込んでおり、この巧妙なひとりよがりの正当化がもたらす虚偽を、「ごんぎつね」は浮き彫りにしているのである。

最後に、信田さよ子『母が重くてたまらない』の文章を引用したい。引用文の中の「母」をごんに、「子ども」を兵十に置き換えて読むことができると思われる。

> 「ママはどうでもいいの、あなたさえ幸せなら」という自己犠牲的発言の背後に淀んでいる欲望の存在を明確にすること。それは裏返せば、自己犠牲的な態度でしか母の欲望を実現することは不可能だったことを証明することでもある。母の自己犠牲は、たった一つ許された欲望実現のための手段なのである。その欲望は子どものためだけに一極集中して向けられる。[18]

(1)拙稿「文学作品の特性と読みの指導――「ごんぎつね」の語りの構造を中心に」『福島大学人間発達文化学類論集　第六号

（人文科学部門）』（二〇〇七年十二月）六八頁

（2）読み研運営委員会編『科学的な「読み」の授業入門　文学作品編』（東洋館出版社　二〇〇〇年）参照

（3）拙著『「出口」論争・「冬景色」論争を再考する』（明治図書一九九九年）

（4）鶴田清司『「ごんぎつね」の〈解釈〉と〈分析〉』（明治図書一九九三年　七六～七七頁）

（5）浦和・高校教師夫妻による息子刺殺事件。一九九二年六月、浦和の高校教師とその妻が、普段から家庭内暴力を振るっていた長男（二十三歳）を刺殺した。長男の家庭内暴力に追い詰められての犯行。また、東京湯島で起きた金属バット殺人事件。一九九六年十一月、東京都文京区湯島に住む団体職員（当時五十二歳）が自室のベッドで寝ていた長男（当時十四歳）を金属バットで殴り殺害。日ごろから家庭内暴力を繰り返す息子に悩み、そのことで思いつめての犯行だった。

（6）南吉の半田中学校時代から代用教員時代を経て東京外語学校英語部時代にかけて（一九二六年から一九三六年）、当時流行し脚光を浴びた文芸思潮との関連性については、これまであまり言及され、研究されてこなかった。浜野卓也『新美南吉の世界』（新評論一九七三年）では、プロレタリア文学の動向との関連について若干触れられているが、十分な論述はされていない。こうした中で、保坂重政「新心理主義と新美南吉――ベルグソンとジョイスを起点として」『新美南吉記念館研究紀要　第十三号』（二〇〇六年）は、特に、南吉の中学から外語学校時代に日本に紹介された「新心理主義」の影響についてスポットを当てて論じており、南吉の小説、その創作方法との内的な影響関係を考える上で、興味深い論考となっている。ただし、外語学校時代については、「心理描写」「心理的流れ」「意識の流れ」といった用語が読書日記にはっきりみられ、当時のイギリス等の文芸思潮をかなり自分のものにしていることが確認されるものの、中学から代用教員時代、すなわち「張紅倫」や「ごんぎつね」を執筆した頃、新心理主義などの最新の文芸思潮をどう南吉が影響を受けていたかについては十分な論拠に乏しい。しかし、私自身としては、「張紅倫」や「ごんぎつね」において南吉が用いた創作技法自体、新心理主義との深い親和性を持っていたと考える。この時期の南吉の中に、ある種、新心理主義的な技法に惹かれる内的因子、必然、宿命を持っていたからこそ、後年、英文学を学び、心理描写、「心内語」「内的独白」の描写といった新心理主義の技法を吸収していったと思われる。これは、南吉の創作技法にとって宿命的な課題ともなったのであり、内

面的な真実、内側・裏側に隠れたリアリティーを抉りだし、描くことが南吉の創作意欲の大きな原動力になっていくのである。

(7)信田さよ子『共依存』(朝日文庫　二〇一二年　三四―三五頁)

(8)西郷竹彦・浜本純逸・足立悦男編『文学教育基本論文集』(明治図書　一九八八年　一九九頁)

(9)府川源一郎『「ごんぎつね」をめぐる謎』(教育出版　二〇〇〇年　一六二頁

(10)信田前掲　五九頁

(11)斎藤学『依存症と家族』(学陽書房　二〇〇九年参照)

(12)鈴木啓子「『ごんぎつね』をどう読むか」(『日本文学』二〇〇四年八月号　三七頁)

(13)信田前掲　一四〇頁

(14)鈴木前掲　三五頁

(15)同　三五頁

(16)信田さよ子『母が重くてたまらない』(春秋社　二〇〇八年一二六頁)。来る日も来る日も兵十に栗や松茸を持ってくるごんの健気で献身的な「ひたむきさ」は、自分の娘や息子に共依存する母親たちの姿と見事なまでに酷似している。信田は、どこまでも粘りつくように娘(ヒカルさん)にとりつき、娘の人生に介入する、母親の共依存の姿を次のように描いている。「夜の一一時、煌々とした光に満ちた教室を出ると、いつも母親が車を駐車場に入れて、息を白くして待っていた。…『ヒカルが寝る間も惜しんで勉強しているのに、ママが楽しているわけにはいかないわ』。母は、目をらんらんと輝かせ、断固とした口調で宣言した。合格祈願のためにお茶断ちをし、毎日特訓講座のために車で送り迎えをし、夜食をつくった。それも、栄養学的には完璧なメニューだった。ヒカルさんが、A中学に合格すると、母はまるで自分の人生の絶頂でもあるかのように狂喜した」(同書二五～二六頁)。

(17)新美南吉の定本全集版では、「おねんぶつ」について、次のような語注が付されている。「施餓鬼の法要、共同祈願の際に、僧・同行衆・親族・家族が法要や祈願をいとなむ家に集まり、お経、和讃、念仏を唱え供養すること」。『定本　新美南吉全集第三巻』(大日本図書　一九八〇年　二八頁)。南吉の郷里である三河地方は、浄土真宗に厚い土地柄である。因みに、南吉の「法名」(浄土真宗では「戒名」とは言わない)は、釈文成。

(18)信田前掲　一二五頁

〈補遺〉

なぜ作家となったのか、その作家誕生に纏わる宿命的な要因

を究明するために、作家の成育歴・生い立ちを取り上げ論じるのが作家論であるが、南吉の生い立ちに焦点を当てた作家論的観点からの研究についても、これまで、多くの研究蓄積がある。周知のように、南吉の生い立ちは、小林一茶(例えば浜野卓也『新美南吉の世界』)や夏目漱石(例えば、佐藤通雅『新美南吉童話論』牧書店一九七〇年)のそれと照らし合わされることがある。私自身も、ある種の「類型性」をそこに感じてきた。

まず、小林一茶(一七六三―一八二八)の生い立ちを見ると、信濃北部、北国街道柏原宿に、中農の父、小林弥五兵衛の長男(弥太郎)として生まれる。三歳の時に生母を失い、祖母の手で育てられたが、祖母が死んで間もなく、八歳の時、継母が迎えられる。一年後に異母弟の仙六が生まれる。弥太郎は継母になじめず、軋轢を繰り返す。そのため、弥太郎は、十四歳にして江戸に奉公に出される。江戸で俳諧を学び、修行を重ね、三九歳で父を看取ったが、その後、十二年間にわたり遺産相続をめぐって継母・異母弟と骨肉の争いを続けた。

夏目漱石(一八六七―一九一六)は、江戸牛込の名主夏目小兵衛直克の末子(五男)として生まれる。庚申の日に生まれ、この日に生まれると大泥棒になるとの迷信から、厄除けのために「金」の文字が入った名前「金之助」と命名される。翌年、塩原昌之助の養子となる。しかし、養父母の夫婦仲が悪化したため、七歳の時、生家に戻り、さらに二年後、養父母が離縁して完全に生家にかえっきたが、養父と実父との軋轢により夏目家への復籍が遅れた。その後、『道草』にも描かれているように、養父は金の無心をして漱石につきまとう。

では、新美南吉(一九一三―一九四三)の場合はどうか。南吉は、父渡辺多蔵、母りゑの「次男」として知多郡半田町岩滑に生まれ、「正八」と名付けられる。この名前は、前年に生まれ生後十八日で亡くなった長男の名前がそのまま付けられた。また、父親が愛好した講談に登場する梁川庄八に由来するとされる。四歳の時、母りゑ死去。二年後、父は再婚。義母の名は「志ん」。異母弟「益吉」が生まれる。八歳の誕生日間近に、正八は、母方の祖母「新美志も」の養子となり、新美正八と改姓。祖母との二人暮らしがはじまるが、祖母との生活が苦痛になり、その年の暮に新美姓のまま実家に戻る。

一茶、漱石、南吉、いずれも、幼少期、もっとも安心感、安定感を必要とする時期に実母と死別し、養子に出されるなど、「生家」との関係がギクシャクしている。生活の場である家庭が、すでに安定した「居場所」とはなりえていない環境につねに晒されていたといえる。子どもの頃から、つねにこの世界に

受け入れられていないのではないかという不安感を抱え、空虚感、満たされなさ、根源的な生きづらさに悩む人生となる。南吉の場合、亡くなった兄「正八」の名を譲り受けたことも、彼の生涯に大きな影を落としているように思われる。つまり、兄の分まで生きなければならないという暗黙の親からの期待・命令に呪縛され続け、たえず兄の代役・代行として自己の存在が引き裂かれ、脅かされる不安に晒されていくからである。

もうひとり、南吉とよく似た生い立ちをもつイギリスの童話作家の例をあげよう。「ピーターパン」の作者ジェームス・マシュー・バリー(一八六〇―一九三七)である。

バリーは、スコットランド生まれの劇作家、童話作家だが、六歳の時、次兄のデービットがスケートの事故で亡くなった。バリーの母はそれ以来、失意のどん底に陥り、毎日泣き暮らすようになった。母はデービットの死を受け入れられず、バリーは、母の関心を引き、母を慰めるために、兄デービットの代役・代行を引き受け、幼い兄の身代わりとして「幼い兄」のまま生きる生き方を選ぶ。しかし、これはあまりに苦しく、虚しい、不安に満ちた日々だった。兄デービットの代役となることでしか、僕はお母さんから愛してもらえない、この身代わりをやめたら僕は捨てられるかもしれないといった不安と怖れが、幼いバリーを悩ましつづけたのである。こうした幼少期の母から受けた拒絶体験こそ、まさに「大人になりたがらない少年＝ピーターパン」が生まれる大きな要因のひとつだったのである。